復讐
奇談

安積沼

13
182
2

於
182
2

小幡小平次死霊物語 復讐安積沼 巻之二

東都 山東庵京傳著
門人 拜田泥牛校

第三條 穂積丹下感孝義贖少年事 并 游侠二見村西開新宜町事

称宜町の男娼家何某ハ。房州小湊誕生寺へ参詣して。くるさに喜次郎を買得られど。正是這義童ハ。高祖菩薩の揚枝の恵の揺錢樹なり。こゝろこゝろ。ふるくに男娼の趣を学ばんべーとそいまざ客を接させど。ふをもちひて。ぢひあさるゞ。其頃称宜町ハ。玉川千之亟しゝ俳優あり。河内通ゝ狂言をせ。ちゝ名るく。其女旦なり。此者偶去次郎を。ひて。世少年義貌といひ伶俐しゝ。

安にみあるべき者にあらべ。いうでゝ苦しき男娼の業とゞさとべき。
枉て出児を我にゐさとべし。弟子しうて藝を学ばせ。後〳〵はなさ
色長にとべしといひて。金二百両とわたして森次郎を乞取るが。是より
喜次郎。玉川歌仏と名を更て容を換ざるこゝをとろこび。糸
くゝみを恩を感じ。前日の武藝にむきくて。ぴゝふるに小歌三絃
舞踊ろゝひを学び。人ゐ越てかゝゝ者なれば。漸〳〵にその業に
通じるが。男色盛の時なれば。彼が美貌みめで。想をうやまゝとの
ゐわゝ。董賢ぶゝに袂をゝちゝ。彌子瑕が桃をもちる安のゝち。
白菊伴作がむゝがるもゝれがゝにいひ出さとね。叔江戸称豆町
の調をとゞめゝに。往古扶の森ろ稲荷ゐ大社ゐて。義妹のうちれゝせ来。
其ゝに称豆等の伝〳〵知ゆゐに。称豆町ゝゐかづゝ。後ふゐ雪踏町とひて。

今の人形町の辺其地名。昔ゐ總ての芝居は町にあり。後ふ今の堺
町ゐ移りるゝぞ。美に穂積丹下ハ。吉次郎とゝゞね。素んゝゐ称豆
ふいゝりてゝ町ゝと繞ゝるに。猿若市村が大芦葉妓と始ゝて。江戸大
蘇庭。太伝太夫が浄瑠璃。和泉太夫が金平芝居。天満八左衛門。江戸孫四郎
が説経坐。庄松弥之助が子供狂言。鶴屋源左衛門が南京あやつりあゞぴ
しを揉とつゝね火喰鳥。闇魔鳥。豪豬。独脚鬼のさゞひ。怪異の物をえ
る和。幼蔵。竜脳。刀玉。縁芋のゝゞひ。奇妙の術を施と芝居をゞ和せき
までゐゝびゝゝ。笛鼓琴三絃の音ハ四方にゐゐびゝゝ。見物の往人ハ塀のゝゝ
に群蜂のごゝゝに集。綿々絡繹ゝて。ゆきゝゝゝくもゝゝどゐ目を
ぶゞめてえ色バゝゝゝ女の塗笠ふゝくゐづきるが。淺茅にちゝ業の絢の粕
芝て。七絲の帯と吉弥風ゝむゝび。紫草の單皮とゝきてゝよゝとわゐむ

もあり。氣俠頭巾に目をうとを出し。小尺夫廉子の六尺袖をとらう
てぐをうの裾み。鉛の袴をつけうる手弱女もあり。或ハるげ肝中
と捨おとがひまでひさうぶり。面のかうり擂根のごゝ〳〵に痩うる男らへ
髭と松虫の声にひねりあげてぐんしゞあの涙をうるが。堂の越の指
うる声して。編笠をてこい動五無湯しぬりをうふもあり。のうひハ松
睛の墨に頬髭をつうり。角鍔の大脇差を関の木に佩て。うる脊をとうり。
猟虎の皮巾差はうるにふゝつをうるもあり。是等ハ所奴の諠喧を笑
ふまうる輩あるべし。伊勢編笠近江菅笠ぶち一文字のうぶひつゝ
の目せさ笠。羽織をうれまゝあれバうゝられうるもあり。婦人ハか
づき綿帽子。扮粧ふ異あるて。容姿をべてあのゞかうぶ。あのゞさ
ぐ集りうゝり。真是耳目を驚うるべき繁昌あり。丹下ハく

るあざいひあもんるゝ。ぶさゝうゝ喜次郎にあらんるとのゝ。欲し
りる紀に。諠喧ありゝくとうゝりて。諸人奔走し。俄にさワゞかりしバ。
おゝ〳〵歩とをゝめてうゝれ人あるとあゝ〳〵うゝ異風に扮粧あり
武士両人ありて。何やゝん争論の形よう。一個ハぬりうゝらの羽織を着て。
うゝバの鮫鞘の両刀を佩。白草の袴ハ着くゝうゝてうゝれう。一個ハ白ゞ
と の袖ぐうゝうゝ羽織を着て。朱鞘の両刀を佩。華清ゞ蒔繪の二尺鞘
とあびぬ。共に熊谷笠をまぶれ着て。伊達風流の扮粧。づれうゝあ人
うゝうゝぬ。此両人争論につのゝ。刀の尻をうゝるれゝ〳〵。ゆうゝれ柄をまき
うて。がうにいをふみかし。声をゝ罵りうゝ。ぐゝ編笠をふゞりをて。刀を
ぬいてうゝり〳〵と打合。一個ハ是うゝら殘髮をう。一個ハ是額うゝぬきあ
げうゝ。両人ゞ刀をぬきうゝとうて。猛烈をうる見物の衆人。そゝ刀をぬきうゝど

安積沼 巻之三

とひつ。四方に乱て逃去れば。街上ふい唯両人刀を丁とうち合せ。はに個空
をうつがひて。恰も漆と汰て両刀とつうつけうるがごとくあて。急に勝負はうんぐ
つるるが。両人が猛さいきれむふやかしん。誰そうこれを勧解ものかく
大に街の坊とんうるぬかるわしも。編笠ふ〜ぬわひるお年かとう歩
く来りるが。美の猫ふとうて。紅梅のいろこさん。氷のごとくうる練貫のうつ
ゆ。羽織とうて。彼きりむとびうる両刀の朔晃こうるうふうちうけまんひつ
けて。両刀とをさワうちぢうふ。笠とうていちぢ。刀権且おさあるあ人。争論の起
ていうあうゆ。とちうざしれども。身不小月ふいあれど。我ちう〜ぢ。婢をつけて。歩両所
の立恨とううさせやとべ〜。ぢ不ハ足抜わ〜の人うかうひとうと。衣食の地
ううこうあてみ方打果ものう。諸人の坊とうるちふあ〜ど。歩両所の弥為傷
如とうさきんどを立人ゆうけうべ〜。ぢ争闘。枉て我にうるいうとゆ人おかうちふ

乞ひうるうとひて勧解れば。猛血眼にうるる両人もぢお年
ダ丈夫の魂ゆやうちりん。ぬ〜カとやうてうるひ赤ろ。冊下ハちうろ乃
所ふあうて。暗れぢ少年とううるひうるれ年のうろひ十七ぢうろ。面貌
花と塊ふがぢ〜。身軀ハ玉を砌ふうれ。ぢ〜。氣色和順。拗風
流。真是男中の美人。業平のうい姿も。これ如いぞうまうるべき。彼
鉢幅の繪海と。嘉ぢうもうぢ所をもとべこれ去次爭にあうぢ〜て
誰ちう〜ぢ世義貌ゆ〜んと。丹下ハ仏中にうろこび。且菱川が繪乃
うつ〜ぬて。ゆうるうぢ感ぢ。彼お年。立ていうぢ。所ハ街上ゆて
婢とぢうるに細話ちぢ〜。椎且沸。両所ちうんぢううと去て我いへうう
と。ぢ〜ぢ〜ぢうとひつ。拳とゆうてうちうる。両人の手とうう
て勧去ぬ。爭闘ちぢうれば。又依喜。諸人集てぐらぐに噂うると

宮ば。彼両人の氏は。うら殘髪なる村西閑右と云人者なり。額ゟ
ぬきさるハ二見重左衛つゝ云者なり。共ハ浪人なて俠者のかしらなり。彼
美少年ハ。原喜次郎と云。今ハ玉川歌仙と云。優か年なり。彼
容のうつくしきに似ず。膽ふとき者なりや。彼がごとく大膽ふあら
どんぶいなでゝあらく猛き者ども共ハ武士もおよ
ばぬ魂なり。二見村西等かそぐの徒よりあ孫ぞ。ゆしに大多と云
べくゆしつるに。ハ多てこゝかゝまりゆることゆゑ。ひるゆ和の幸
なるといいて。少年と讃ゆ。丹下ハ。ふゝの茶店ふありてこれを
茶果然喜次郎なること。初りて。中ゆゝ。ゝこび。今日ハ。
あゝれば。明日来りてゆべゝと。ゆ日ハ且旅病ふ。ゝりぬ。ゆゝ。
六方男達ゝ云者ありて。各一組の異名あり。鶴鶴組。狭
棒組。唐犬組。鼠離組のゝゝ。神祇組の白柄。吉屋風のつゝゝゝ。或
ハ茶筅立髪の異風と好ゝ。東叡山の花の内。三流の月の夜ハ更ゆ。金
竜山の朝嵐。泥町の雪の日も。時ゝ。のゝゝ。ありき。鞘あて。禍と
なりにこゝゝゝて。やゝもゝ。ゆゝ。ば。争論を惹出ゝ。抜拆羅。狼藉のゝを
こゝゝして。市街ふ。笑ゆる者ゆりゝ。彼二見村西の。人も。ゆ六方の。軍
なりゝゝ。かゝて。丹下ハ。翌日ゝゝ。ゝび。禄宜町にいゝ。玉川千之丞が
家とゝゝゝて。歌仙ふ。対面せんこゝをもゝむ。ゝ。歌仙。家よあ
ゝてきゝゝ。ゝ。ゝ。

きじも爰にやむこゝを得ざる孝ありて權侍志ふまさぐひが
ゝ〜さく丹下がいろく我言とうけゝれぐゝさそのいそれと
仇母まれつまを說ゆゝ〜ゆこゝろへべき汁あゝゝ我速ゆお
こゝろへべ〜。ゑ仏がいろく〜。これ別の事に仕らど。菱川があ仕
あてさぶゝて安ゆゝひつらん。我祖母并に父。裏雲平しつ者ゆゝれ
て非命に死をたゝのくゝゝつど家宝の霊剣とうぐる。我ゝ仇を
報て。父母が修羅の妄執とゝゝんと。胃其志ハあゝゝ。父母の讐
ゝる仏弟ゆれだゝ心の侍ゝ母ゝゝゆひぐゝ〜。父母の讐ゆゝ共ふ天と戴
らざるのこゝろゝれぐゝさて怪切歯咬牙悔と志のびてむかゝ〜月
日とゝ〜つるゝゝゝ志を遂ごゝるゝうちゝ令に志ぐひぐゝ〜ゝゝ丹
下がいろく〜子〜て父の讐と報ハざれハ子ふあゝゝどゝ。公羊傳

あもうえうれば。ぬん分がごとくに孝子ハかうるを恵志あるべき
業と。察せざるふハあるべからず。一度大和ふいとう。娘と婚儀ととく
の人。我等親ゑがのごみとなげしめて後。そこに仇方へも立ぬん
分の仏まをせに仇人のゆゑとなるべきてハいなるあるべん。敦仏がいとく
志をもとくか似られども。父母の讐を忘ること苦に寝手と抱ハ
不仕ゑいとういまゞ讐とむくふざるこいくそ貴家の富ふあひ
て独ゑるゑみをきふんや。病志となげてのちハ何ゑまれ母ハ
りにとのふまゞをつよ。丹下ハお仏がいふ和をべてこゑるにあ
らられば大れ感嘆していとくなるなれいあびまへもうべ
ゑうをるゑうハ我今日母ん分と贖出をべゝ。一日もをやく仇人
の住所を探ゑ。病志と遂てゑ後ゑるゑゞ我婿とゑうまへといひて。

仏家のあるゞ千ゑ銭とよびびゑうて対面ゝ此ゆを儀ゝけまい。
千ゑ銭ハ曽情ふゑき者ゑれば。丹下ゞ志の厚ゑ感ト。且お仏ゞ
分の幸ゑとよゑこびて速にうけ初きれを。丹下ハ用意の金子
三百両と出ゝて。お仏ゞ分にゑんゑふ。千ゑ銭ハ原二百あまて
歎仏ゞ分と乞取られば。二百あハうけ母さむべきゑ。ゆり百あハ決して
うけゝゑふ。丹下がいとく。仏百あハこれまで彼と苦ゑ月の費を
つくのゑんゑて。嘉だゑう志を表するゑり。速にうけおさゑまへとい
ゞも。ゑゑ銭ゑゑ辞ゑてうけざれば。名誉の色長とよゑゑゑゑ
ありて。俳優ゑハゑゞらゝくゆゑうきんゞ多ありと。丹下ハ仏年に
感ゞゑう。母ゑ銭ハ二お仏ゞ分費他文とゑう出ゝてゑんゝ
あゑよ。お仏ゞ他文とゑて四年以ゑ父母にゑれゝ何のゑゑゝさ

と思ひ出し、さくさくさきぶつえものハ涙なり。丹下ハ美ぐの両
刀をとりて。お仏よあえて婚ゐきでの心を表し。又金拾
両をあえて雑費銀とおさしめ。おん身今日よりハ雛優とやめ
て原の武士ふえり。已に我家の婿なり。病志をとげ急速に来りて
親子ぶ仏ゆきもあ人。無縁面と對ぶれども相見こと難。有縁千里
も相逢こと易し。実ことなりといいれば。歌仏ハ数行
の涙し、丹下。天地と云ふ貴家の大恩。心に銘じ骨に
徹て。身を粉にするまで忘るまじ。しかし運命つたなく討に
あひ京。楽丈ハ早馬と生れて家だるも洪恩ハ報ゆべ
くいひて。ぶさをう涙をはらはらと丹下
にあえていなく。此鏡ハ母の遺留物なりて。古郷よりおん

うぬ。これを本国に持ゆきて。我病志とをげて再会をべき
期まぐの証しぶ。母女の心と慰めゆくべし。丹下これを接て
ゑるに鏡の裏面中央に月谷の紋を彫つけ。めぐりに松竹亀
鶴と鋳つけ。これぶ婚儀ととぶの掟なりといひて
文にうつくしい上ハ一日もはや本国よりおん身とを
ぶりて恙なくせよといひて。歌仏ハ脊をなでて子ら亟に一礼。
ちや別と告て立ちんとす。歌仏ハ恩人よ引ゆきものびぐしぶ行まも
再会の時を祝してむ仏ぶんといひて。只依々愁々涙を
ゆえ入て門ぶ出ぶる。丹下ハ夜ハ旅舎ぶ病し。翌日もとに報
見し。夜と日ふつぎて大和ぶ入り。憂児に対して喜次郎ぶ
始終をとう。証の鏡とあえ入られば。憂児ぶ胸裡ハ忽雨過

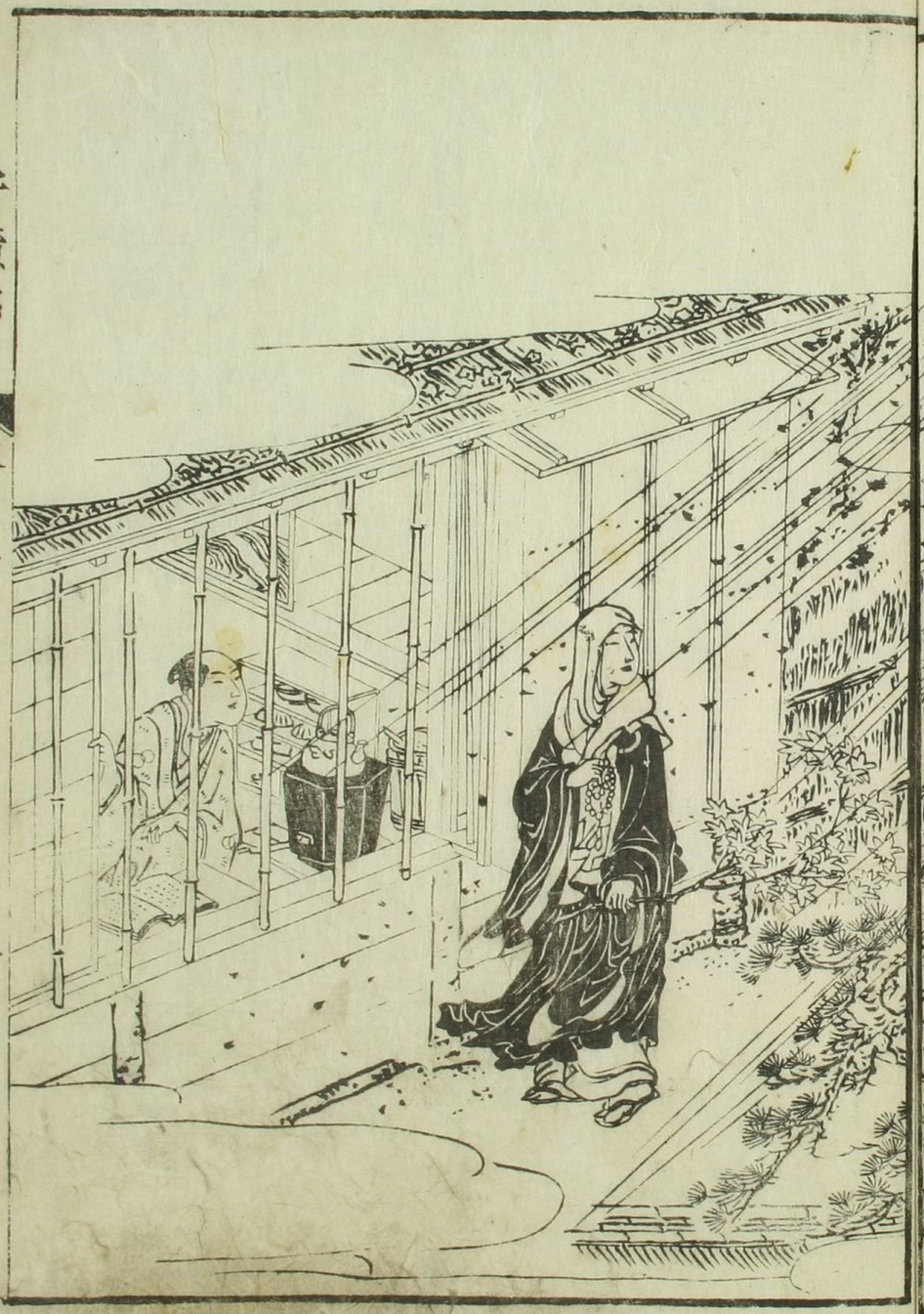
雲散て一輪の皎月現出るごとくにおぼえて日あゝぞして病全快
なりれば父母のよろこびかぎりなし。されども唯お仏が宿志を
ぐるゆゑと俟て一佛出世二佛上天の幸ひとぞあるる

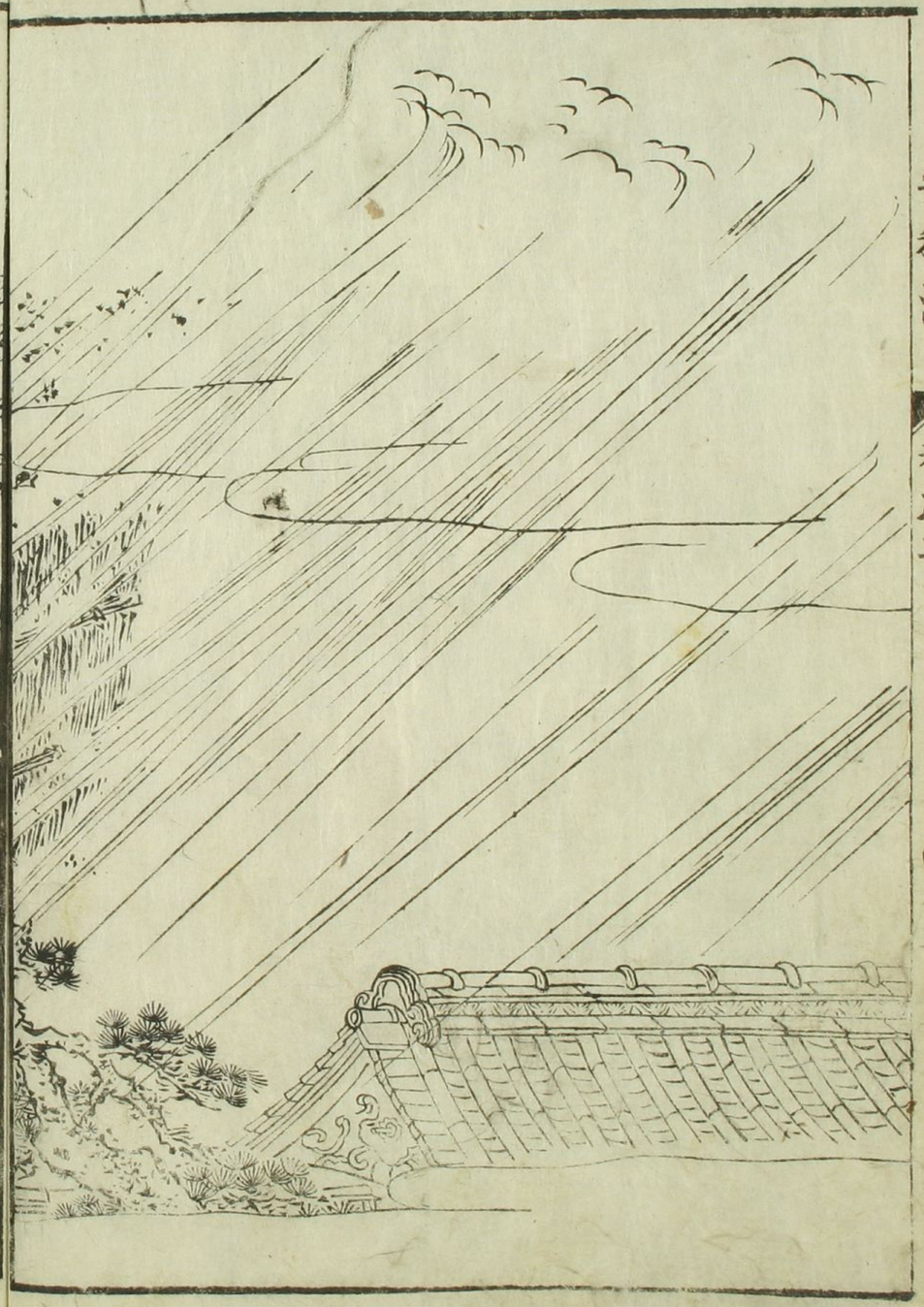
第四條

鰻鱺太郎兵衛小鱔小平次事 并了然禪尼相二波門一説二因縁事

かくて教仏の丹下が厚志ありて。爾と贖れ給へば。今は仏安
しとさとり仇人天に路ありて上り。地に門ありて入るとも。我一
念の誠をもつて探ゞ遠に頭をとりて父等が寃魂を
慰もべし。かくまれるる人は。一日も志のびがたしと。花を立てる
はりひれども。仇人いづくに逃去しや。寄なりとも仏あてなられば。
せんもなく。且吉日をえらびて元服し。本性と名告て仇人

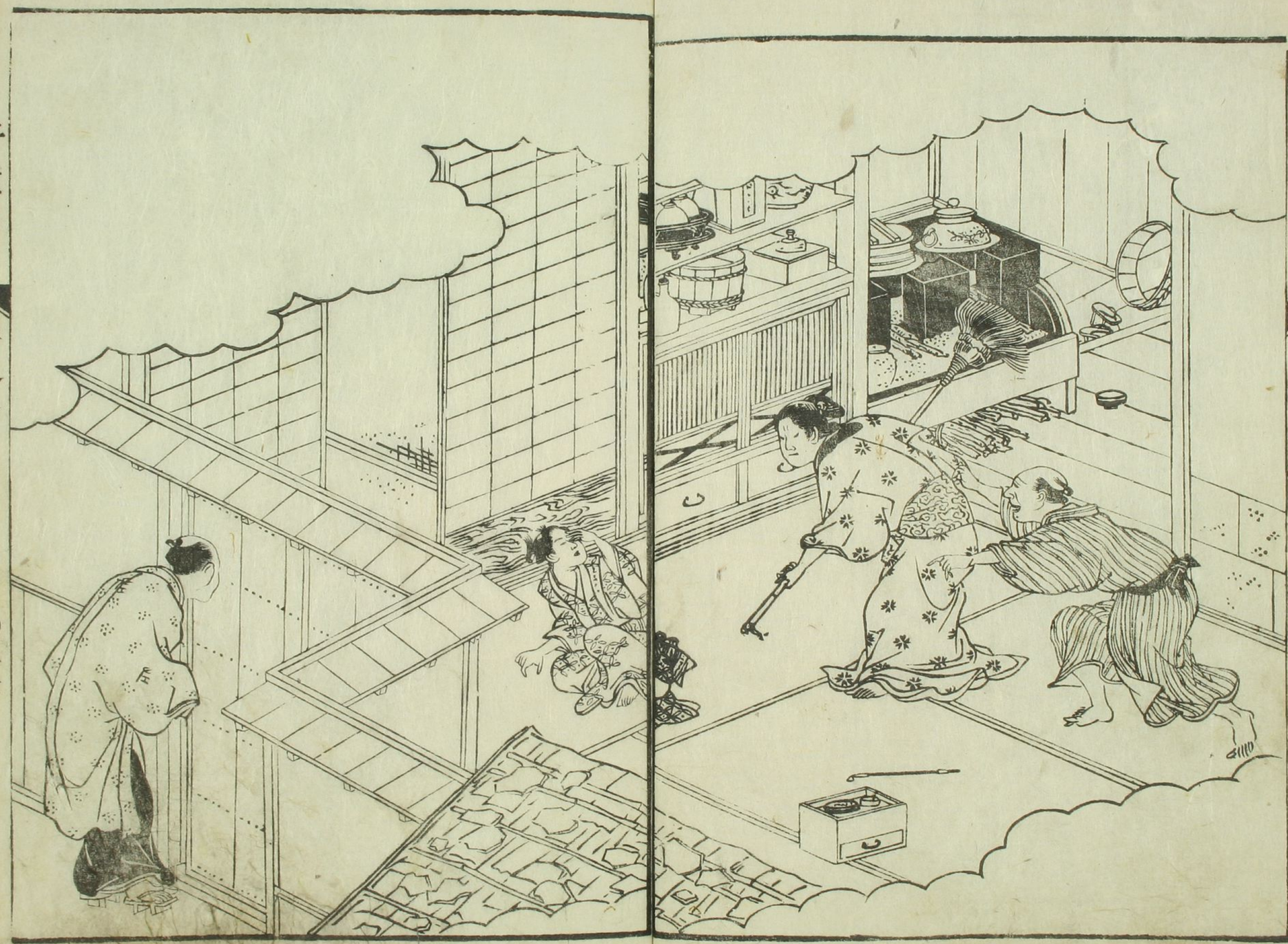
それとさとりまんと欲すれ。性名を更て山井波門とぞ叫ぶ。若
るに彼村西閑仏二見重左衛つ者両人。主仏が元服をあるよし
を聞て。一日若〻しくとつる酒肴をとらづさ人来りて是を賀
をとられ。とつる日。両人かとく打果をべらし。主仏が勧解ありう
て講解し。事なくおさまりしをいさゝか謝るの意なるべし。扨は
京師大寺宗勅が流儀の一節截れ。高三隆達が小謡をあいを
ることを学ばれ。波門曾さるゞの技を蔵式学びしうちにい
きて一節截をとり吹られば。仇人をとゞめる間。あらく尚四丹
後殿前なる人所に。家を素て獨居し。一節きりをとりえて
ありしとさとりたるに。ぞくゝもあるべして門人あるさ集来て
其業大師とあんまれ。此丹好屋敷に湯女風呂





あまりにうつ。茶筅豆髪まさ羽織紋白柄の異風と丹前姿といふも。原は和ゑ通ふさとを男多の用給ふ起るとぞ。法人ゑほとと
てゑんぞあるぎつしき和るれば。仇人のゆく久と探らんにい便りしめ
らて。山延をえらびて住るあり。かくて三年裏去秋ゑてゑやく冬
のあるばいつるりるが。一日門人多も来を波つ出ふ家ゑ育つ花ぐとうび
てゑづから茶と煮てをうつるぐにゑ父きてゑ〜ゑゆ〜もん
のことぐも思ひめぐ〜〜病志をしげぐてむゑ〜〜月日と巳をこと
を結ひるゑ〜〜も。岡雨ちゑくとふちきて。ぐろにものかゑ〜らけ
るが。外のゑて人のおゑひあり。晴くるゑ雨いさぶゑるれものをあう
ゑてゑるい我身ゑうるとゑみ〜〜もうぐゑう。ゑちぐふゑぐきさぐ
ゑれい垂のゑるゑふるゑゑ〜とうら。ゑちぐふゑるゑと。波門

あ〜ゑゑと出ゆびゑ。ひわがゑくは我ゑに吉凶とかんぐきゑ
るべ〜ゑ。仇がいゑゆん身の人品とうぐゑに。才英をかゑりて京不
ぐゑの若人ゑあゑぐとゑゑゑう。雨やゑゑの報ゑ神ゑが一生の禍福
吉凶とかんがゑるべ〜ゑて。波門が面と相〜良久ていゑく。神ゑ從
来孝義をまゑゑゑとゑゑゑるぐの苦辛に言て。今已れん中
大望といぐゑの相あり。ゑるやいゑゑ。波門ゑゑこていゑく。のゑゑ
所霧ぐゑゑもゑゑいぐ。ゑゑゑゑゑゑ。神ゑ身代
浸も京不百折千磨にあひて。おゑゑこと。なぐふゑん。ゑゑの
ゑぐゑゑつひゆい志と遂。のちくゑゑ大に福あるべ〜。性考べ〜と
てゑぐゑゑく眼とゑぐ。口のうちに呪詛をゑゑん念ぐあゑりて。学
のかとゑゑりてゑゑく



得布而擒　得布而脱

扨月後素の禍福吉凶ハ八字の分中にあり。よく〳〵ふまゆげえて忘るべからずとぞ。波門ハ了然のこゝろ尽く心裡に的中ちがれば。大に感嘆し。再三拜謝してよろこび。茶を煮てもてなす。自然火と

かさねきて。禪尼の衣をあぶりかゝるかどゝていとゝゆんごろに

欵待れば。了然も彼が志のあつきふやゆでけん。懐と探り一ッの香

包をとり出していとく。これハ我首宮中に仕へし時。君より賜りさ

る薫物あり。人死にあんくゝ絶入るも。此香の氣鼻中に

入る時ハ一度蘇生の奇特ありて。漢武の返魂香。徳哥が返魂白檀

香。ともまがふものゝ名づけて零陵甦醒香と称ず。天竺ふハ

多掲羅とゝ。南越志に鬱草芸香とゝひ。淮南子に芸草ハ死

を以て生に復べしとあるハ乃此霊香なり。おゝをワちて扨了然に

べし。後日おのづからこれをとりもつる時あらん。必しも等閑に焚失ふと

うれとゝひてあえなれば。波門益感謝してこれを接とゝわりるこれ。

やゝく雨ふみ空ハれぬるバ。禪尼ハ別を告てまろ出ぬ。扨此了然

尼とゝい。京師の人。葛山氏の女にて。大内ふ仕へやどり木といひし女房

なり。君ゝれさをもひて後。仕へと辞して家ふかへしが。暫間のこと紙。人の媒

去りて。ふ二三人もうみかゝへとゝもとられて。松田仁某と云医師

のもとに嫁しあきけり。二十ふ歳の時まで。男女三人のゝとうみれ

バ。夫に去りぐれるとひつひに髪と物ろ。衣と染臨濟黄檗の諸

禪林に入りて。参道ひろめ。つゝ。後江戸より。木庵の弟子白翁道

泰和尚が弱迦の庵とゝぐよて法と受んこゝ。

白髮いとく。佛法み志あるものハ客の義を好まゞ。ものしゝ客をつくろふことふし。汝をぐれて美姿あり。庵中にそらしらゞ丗の人にもあゝうすんとつゝひてかひなりぞ。尼カ寺ゝ出て其色の町家よ入りて。ものゝこと紙語りそゝる羽織とゝろて出ゆ小いれ。おしもの業るやうにあるしゝが彼羽の赤くやけるとゝろ。額よりちぐめて新のゝちくゆ一つけて。尽く面とそゝるし。

扨筆とゝりて頌とかさぬ

昔遊宮裡燒蘭麝　今入禪林燎面皮
四序流行亦如此　不知誰是箇中移

いまゝ身と捨てゞく身れうかゝゆ一絶の薪し思ハさりせハ
足ゝり不然の乃徳丗ふるく宮えて千歳の義詩とあれゝ式と柴の一本

一時隨筆。望海毎談。新著聞集等に。記して詳なり。のちゆハ江戸鉄炮洲に草庵をむすびて住ぬ。渡門が家に雨やどりせしゝ時なるべし。陽家の茂睡。ゆゝび遠侯等ゝゝ和おを以て交りしゝ吟ぬ。晩年にゝゝ。江戸高田藩合泰寺なるの寺主ゝゝゝ。泰雲可然元總大和尚と称ぞ。長命して天文元年辛卯九月十八日飯寂あり。真是さぐひまれある女子ありけり。爰に又ゆゝ法。江戸本橋町に。鰻鱺太郎兵衛ゝゝ俳優ありけり。仏舎利ゝゝ雜劇をせゝゝゝ。名人の業るゝ宮えるゝ者あて。是乃森田芝居の始祖なり。れゞ弟子ゆ小鱺小平次ゝゝ者あり。俳優の業ハ至極下ゆ者ゆゝに。江戸の大ゝ舞妓へハ出ぞ。諸國の因舎芝居ふやとゝれ出て。いゝまゞしゝく丗ゝゝぬ。れゞ諢名を小鱺ゝゝゝ。

ゆへとうづぬるに。師ハ鰻鱺を殺さ〻ひて。藝の味ひよき名人なれども。彼ハ藝の味ひいやしく下手なゆゑに。鱺ハ中さ〻ひ〻と云意にて。小鰻ばかりを。これ藝の巧拙を魚の味ひ知ると云る。澤名と。一説に彼ハ常陸國字治郡小幡の里乃生れなる人にて。小幡小平次といひしとも云。此説実ならん乎。又小平次藝ハ中あて尽く下手なれ共。唯一ツ幽霊の狂言のみハ別に妙あり。て。名人の能優もかゝる人に幽霊小平次ともいひしとぞ。扨小平次が先妻ハ一人の男子を生て後病みよりて死ぬ。その男子を小太郎とよびて今年八歳に。生れつききよらかいとゝこゝろなるが。後妻おせんの妻おせんとゝろなる者みて小太郎を憎み。動もすれバ怒罵打ちゝさあざ〻して。少ハ生活とやさ

ざりれバ小平次うゝ〻ちひ。妻と離別せんと思ふの意なれども。彼ハ嫁一ツ有り。財産二十貫ばかり有りしゆへに。これを償ハざれバ離別ハ難し。こゝにおのれ死りれバ彼を制するこゝあるべきハ。只胸をさとり懐を去のびて。逃る所に。彼玉川千之亟。歌仏を丹下に与へ。そのゝち小太郎をせんと。先ハ小平次ハ幸のゆへに思ひ遠れうけ。こゝにて小太郎と千之亟ハ無ぶり人つゝいしりの妻に又彼雲平ハ弟に右軍をゝらの者あり。兄雲平房別して人を害し逃去しゆゑに。中のゝ〻ゝ己も無をせざるゝ。漂泊してゝ〻こ人の家ハ投托て。居所もさだめどろ〻ゝ暮てゝ〻小鼓をゝちるゆゑに。姓名を安達左九郎と変て。田舎芝居の鼓うちゝ〻りてをゝ〻いひぬ。小鰻小平次ゝん〻ゝ田舎芝居

て出あひ考へくゝるうて。江戸ハ居るうち八日ゝ小平次が家にゆきそし。
いろの頃ちらゝ小平次が妻と共通してよろゝく彼が晴そうゞいて
密會しるゞ素小平次ハ殺さ考るしゞ。夢ゆもこれを知らざる
けり

田安文庫

安積沼卷之二畢